

# 「ノルディステの陽光」



1998年12月20日から1999年1月20日までの約1ヶ月間、ブラジル人の友人エリオ・マリッツ・サトウとブラジル北東地方(ノルディステ)を訪れた時の旅の記録です。

## 「エリオとの出会い」

ことや旅の話題などを話し合うと気が合って、時間を共にするほど兄弟のように何でも話せる仲になった

「ミヤさん、一緒にブラジルに行かない？」

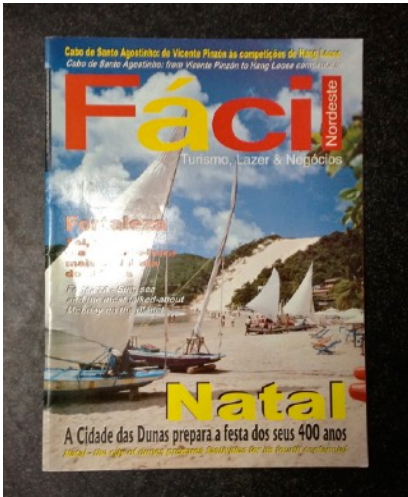
1997年夏、オレンジ色の光がスタジオに差し込む夏の夕暮れ、エリオは弾いていたウクレレの手を止めると思いがけない言葉を僕に投げかけた。

エリオ・マリッツ・サトウ (Helio Maliz Sato)、28才。ブラジルから来日して8年、日本の大手電気メーカーに勤める傍ら、ジャズダンスに熱中する日系ブラジル人の友人だ。出会ったところのエリオの印象はどちらかというあまり良くはなかった。長髪をなびかせて男性フェロモンをプンプンと匂わせているチャラチャラしたヤツという印象しかなかったけど、音楽の



エリオは近々8年ぶりにブラジルに帰ると言う。サンパウロに近い故郷**ロンドリーナ**に戻るだけでなく、この際だからまだ行ったことのない「北東地方(ノルディステ)」をぜひ訪れてみたいと目を輝かせて語り始め、ついでに僕を誘ってきたと言う訳だ。「日本にも良い景色はいっぱいあるけど、ブラジルの北東地方にもすばらしい景色があるんだよ。ミヤさんに良い写真をとって欲しいんだ、一緒に行こうよ!」

それからは会うたびにエリオは盛んに僕をブラジルに誘うようになった。エリオの熱意を感じながらも、ブラジルは僕にとっては遠く遙かな存在だった。そして1年が過ぎ、その冬にブラジルに行くことを決めたエリオはスタジオに遊びにくる度に細かな旅行プランを持って来るので、さすがに僕も早く決断しなくちゃいけないと思うようになった。未知の国に行きたい気持ちはやまやまだけど、仕事のことや旅行資金などを考えるとすぐにOKというわけにはいかない。



片手に「**バイヤの音楽**は最高だよ、**カポエイラ**(格闘技)だって本場で見られるし、**ナタール**というところではサンドバギーに乗って海岸を旅するんだよ」と熱く語った。

それでも僕が迷っているとエリオは「ミヤさん、何も心配いらぬよ、僕に全部まかせてよ。通訳

もできるし写真の助手だってやるから。なにより団体旅行じゃないんだよ。こんなチャンスはなかなかやってこないよ」

「**出会いは偶然の産物ではなく、偶然を装った必然なのだ**」「**写真は一期一会の世界**」「**見る前に跳べ!!**」「**旅は人生の縮図である**」・・・僕の信条が頭の中をぐるぐると猛スピードで駆け巡る…、「確かにこんな良い機会を逃したら2度と



行けないかも知れない。・・・よし決めたっ、**ブラジルへ行こう!!**」

**宮城谷好是・映像クリエイター49才の大いなる決断だった!**

その年の11月1日。エリオはブラジルに向けて一足先に出発した。

僕は12月21日に彼の後を追うことになった。旅行期間は約1ヶ月と決め、旅行代理店に旅費を支払い、ビザの取得に行き、国際免許証を受け取りに行くと、いよいよ本当にブラジルに行くのだと実感が湧いてきた。「日本食が恋しいので、インスタントのお茶漬けや海苔が欲しいから持ってきて」とか、「毎日海へ泳ぎに行ってもう真っ黒だよ」とか時々エリオからメールが届いた。出発までの慌しい時間が過ぎ、50日前に出発したエリオの後を追って**1998年12月20日、僕はサンパウロ行き日本航空に乗り、エリオが待つロンドリーナに向けて旅立った。**

## 「ロンドリーナへ」

成田からロスアンジェルス経由でサンパウロまでは約24時間。サンパウロからさらに国内線に乗り換え、エリオのいるロンドリーナへ。我が家からロンドリーナの空港までの時間はなんと36時間もかかった。でも機上の人になってしまえば、割り切ってその空間を楽しむしかない。機内ではよく寝られて日頃の睡眠不足が解消できたし、長編小説を読んだり、時々お酒を飲んだりしているうちにサンパウロに着いてしまった。サンパウロ空港は空港内も危険だから気を抜いてはいけなと出発前に忠告してくれた人がいたので、カメラ機材を大事に抱えながら国内線乗り場へと向かった。

皆がサンパウロはあまりにも危険だと吹聴するものだから周りの人が怪しく見えて困ったけど、僕はこういう場合運が良い。同じ機内に豊橋で働いていたという日系の男性が「僕もロンドリーナに行くから、良かったらご一緒しましょう」と言ってくれたのだ。おかげでサンパウロ空港での乗り換え手続きも簡単に済んで、ロンドリーナ空港に予定通り到着することができた。

サンパウロ空港で不思議に思ったことがある。サンパウロは日系人も多く、顔つきも殆ど日本人と変わらないのに空港内で航空会社のスタッフから僕は必ず日本人に見られた。一体僕のどこを見て日本人と日系人を区別しているのか知りたかった。33

ロンドリーナ空港に迎えに来てくれたエリオは毎日海へ行っていたというメールのとおり日焼けして真っ黒で精悍さが増していた。再会の挨拶もそこそこにエリオのお兄さん、マリオの運転でロンドリーナのお姉さん、マウリアが待つ家へと向かった。マウリアの家は僕好みの平屋建てのシン

ブルな家だった。マウリアの兄弟やクリスマスパーティのため集まっていた親戚の人たちを紹介してもらった。エリオはなんと佐藤家9人兄弟『マウリア（長姉）、マウゾ（長兄）、マウリオ（次兄、日本在住）、マウダ（次女、デザイナーで医者と結婚）、マダ（三女、日本在住）、マリオ、パウロ（双子の三男、ロンドリーナ在住）、そしてエリオ』の9番目。一番上の兄弟とは死別してしまっただけで、8人の兄弟姉妹は健在だ。

ロンドリーナと言う町の名前の響きが可愛いので聞いてみると、イギリス人がつけた名前が「小さなロンドン」という意味だそうだ。

夜も更けた頃、マリオが「ミヤさん、到着したばかりでなんだけど、明日イグアスの滝を見に行きませんか?」と言った。イグアスの滝といえば、ブラジルとアルゼンチンの両国にまたがる世界最大級の滝だ。「おーっ、すごいね。ぜひ連れてって!!」というのと、「じゃ明朝5時に迎えにくるね」と言っただけでマリオは自宅へ戻っていった。「エリオ、ところでここからイグアスの滝までどのくらいかかるの?」と聞くと「そーだね、500キロ位かな。マリオの車で行くんだよ」とエリオ。「えっ、車でいくの? 500キロを・・・」片道500キロをちょっとそこまで……。ブラジルは日本の国土面積の22倍もあるのだからスケール感が全然違ってあたりまえかも知れないが、それにしてもこの感覚の違いはなんだろう!!

## 「イグアスの滝」

翌朝、まだ暗い中、僕とエリオはマリオの車に乗り込んだ。

夜明けが近づくとともに道路の両側に広がる田園風景がうっすらと見え始めた。景色が低くて、おまけにとっても広い。いや広いなんて言葉にするのが無意味に思える。昇ってきた太陽の塊から放た

れた灼熱の光が眠りから覚めたばかりのブラジルの大地にじわじわと吸い込まれていく。

「本当にブラジルに来たんだ!」



追い越していく大型トラックのジュラルミンのボディに朝日が射してキラキラと輝きながら光の軌跡を描いていく。僕はロードムービーの主人公になったような快感を覚えた。

パラナ州の道路はとても整備されていて車は快適に走り、500キロの道のりにも拘らず午前中にはイグアスの滝に到着してしまった。

驚くことにロンドリーナの郊外からイグアスの滝に到着するまでの約500キロ間に信号は**わずかに3機だった**。大きな街はなかったけど、それにしても3機とは驚きを通り越してあきれてしまった。



滝の近くの町で食事をし、滝に行く前に**イタイプ発電所**を見学した。世界最大の水力発電所である

イタイプ発電所は、イグアスの滝からさほど遠くないパラグアイとブラジルの国境に建設されている。

ブラジルは大きな炭田がないため、急成長する産業への電力需要を満たすため発電を水力に頼らなければならない、大規模なダム建設に力を入れてきた。最初の水力発電は1889年。当時は半分にも満たなかった火力発電が、1世紀後には **水力発電の4,587万KW**に対して、火力発電は730万KWと、比率は6.28対1に逆転している。日本にもこんな滝があれば、原子力発電に頼らなくてもやっていけるのに。国土の狭い日本から見るとうらやましい限りだ。



イグアスの滝はブラジルとアルゼンチンの2国にまたがる**大小300もの滝**が存在していて、**滝幅4km、最大落差約80m、毎秒6万5千トン**の水量



を誇る世界最大級の滝だ。

駐車場に「クマツチ」と言う動物がいた。アライグマとありくいをミックスしたような可愛い顔をしているが、旅行者のバッグの中味の食べ物を狙う泥棒系の動物らしい。



僕たちは遊歩道に沿って進んでいった。遊歩道にはかなりの蝶が風に揺られてふわふわと舞っていた。小学校のころ、僕は蝶博士と異名をとるほど蝶の採集に熱中していた。でもこんなに蝶が舞っている光景を今まで見たことがない。しかも、この公園内に生息する蝶は人から危害を与えられたことがないのか、僕がカメラを出して撮影していると、カメラの上に止まって動かないのには驚いた。ブラジルの蝶は赤や黄色に反応して興奮するらしく、黄色人種の僕に興奮して集まってきたのだとマリオという。でもこの説はかなり怪しい。

「今日は水が少ないなあ。水が多いときにはもっと滝の水の色が茶色に濁っていて、遊歩道まで水しぶきが飛んでくるんですよ」とマリオが言った。確かに写真で見るイグアスの滝の色はもっと茶色い。マリオがイグアスの滝についてとても詳しいので、エリオを訪ねると「マリオは何年前にこの近くの発電所で働いていて、お客さんが遠くからくる度に案内していたからとても詳しくなったんだ」と理由を話してくれた。

「悪魔のど笛」という特別な名前をついた滝は、その名が示すように日本の滝とは比べ物にならないほどの水量、音量とも迫力があつた。日本



の滝は刃物に例えると切れ味の鋭い日本刀のような感じに対してこの滝にはそういう鋭利さは感じられない。大きな鉈(なた)、いや巨大なギロチンのようだ。

3時間ほどイグアスの滝を周遊したあと僕たちは帰路についた。ロンドリーナのお姉さんの家に着いたのは途中で夕食をとったりしていたのにまだ午後11時頃だった。往復1000キロの道のりをマ

リオはたった一人で運転し、何事もなかったかのように涼しげな顔をして帰っていった。



ブラジルの大地の広さ、片道3機しかない信号の数、イグアスの滝の雄大さと往復一人で運転したマリオの

タフネスぶり・・・

いずれにしてもブラジルのスケールの大きさに驚き、舌を巻いた一日だった。

## 「ブラジルでクリスマス」

翌日12月24日はクリスマス・イヴ。集まった人たちとは殆ど初対面でしかも言葉は通じない。しかし、僕の心配は全く無用だった。



### バネッサ

集まった人たちとはすぐ打ち解けて楽しいクリスマス・イヴを過ごすことができた。全員でゲームが始まった。

1等賞の景品は僕が日本から奮発して持ってきた「プレステ2」だ。お返しにゲームの景品としてブラジル製のおしゃれな時計をもらった。ゲームの後は思い思いに時間をすごした。



僕は少し酔っぱらってしまったので、ハンモックに乗ってゆらゆら揺れていた。あまりに気持ちがいいので日本に帰ったら絶対ハンモックを買うぞうと思ったがまだ購入にいたっていない。



「ブラジルにはいろいろな人種が住んでいるんだ」とエリオが言う。地域によって住む人が異なるようで、北部は黒人系が多く、サンパウロ近郊はアジア系、南部にはドイツ系やイタリア系の人々が多く住んでいると言った。各地域で流れている音楽や踊りも少しずつ違うけど、ブラジル人は肌の色が違っていてもお互い同国人として認め合っていて、それぞれの文化を楽しんでいる部分もあるようだ。

今回は黒人の多い北東地方を中心にまわるプランだから偏った見方をしないようにとエリオは考えてくれて、少しだけ南の町を見ておこうとブラジルで一番整備の整った町、パラナ州クリチバで数日過ごしてからノルディステ(ブラジル北東地方)に向かうことになった。半年かがりでエリオが練り上げたノルディステ地方を駆け巡る旅がいよいよ始まろうとしていた。